

成人期きょうだい研究に向けての理論枠組みの構築

— 「アンビバレンス」概念の再検討 —

A theoretical framework for the analysis of siblings in adulthood: reconsideration of an “Ambivalence”

吉 原 千 賀

Chika Yoshihara

1. 問題の所在

従来の家族研究では、暗黙に核家族を想定し、親子関係、夫婦関係をもっている人（もてる人）の家族関係に焦点が当てられてきた。家族研究におけるこの狭い焦点化のなかで、きょうだい関係、とりわけ成人期以降のきょうだい関係は研究者たちから「見えなく」なり、ライフコースを通して家族関係の周縁に追いやられてきた。一方、長寿高齢化、未婚化、晩婚化、ライフスタイルの多様化のなかで、獲得的な関係性である配偶者や子どもといった家族との関係性が得られない人や離死別者のように長い人生のなかでその関係性を失った人、チャイルドフリー、あるいは非婚者といったそもそも家族をもつことを選択しない人が増加している。このような「非標準的」家族の増加、家族構造の複雑化に伴い、家族研究のための新しい概念的、方法論的ツールが求められている。

家族関係のなかでも親子関係と夫婦関係の研究に集中してきたことへの批判的検討を進めるなかで、研究者たちの間でも多様な家族生活全体に焦点を当てようとする動きが出てきている。すなわち、親や子、妻や夫といった狭い世代間、世代内家族関係から個人と彼らの親族とがライフコースの全体にわたってお互いに関係していくその有様への研究関心のシフトである。Walker ら（2005）は、それを「an invisible family lifecourse」への注目の必要性とし

て強調し、その際に重要な鍵を握るのがきょうだい研究なのだと主張する。なぜなら、きょうだい研究、とりわけ成人期のきょうだい関係についての研究は、両親と子ども達の間関係や、妻と夫との間関係を越えた家族のつながりについてのフレキシブルな概念化を促すからだという。加えて、成人期のきょうだい関係が一方では親や子、パートナーとの関係のように義務的でありながら、もう一方では友人などの非親族関係に近いようなボランタリーな性質をもつため、親子関係やパートナー関係によって概念化されたものの外側にある。それゆえ、非親族関係とそれらを、あるいは「定位家族」と「生殖家族」とを橋渡しするような関係性として位置づけられ、研究者たちにより広い社会的ネットワークに焦点を当てることを求めるからである。また、きょうだい関係は、親や子どもとよりも長期にわたる関係性でもある。結果、研究者たちがこれまで「潜在的」で「見えていなかった」家族との関係性を含めてより長期的視点で検討するように導くのだというわけである。

成人期におけるきょうだいとの関係は、親密な関係性もあれば、名ばかりのものもあるなど、そこには多様性がある。多様性が生み出されるのは、成人期におけるきょうだい関係が「義務」と「任意」というアンビバレントな性質を持ち合わせているからだと考えられる。アンビバレントな性質をもつ世代内のつながりの検討は、家族研究者たちに家族境界を広げたり、狭めたりするための方法の検討へと導く (Johnson, 1995)。もつというなら、成人期のきょうだい関係のもつ義務的でありながらボランタリーでもあるというアンビバレントな性質のために、その関係について検討することは概念的に家族関係の拡張と変化を捉えるうえで重要になるのである。そこで本稿では、家族関係についての先行研究を再検討することを通じて、成人期におけるきょうだい関係分析のための新たな分析枠組みの構築を試みるとともに、家族研究のための新しい概念的、方法論的ツールを得るための手がかりを探っていきたい。

2. 世代間関係と「世代間連帯」モデル

1960年代にベトナム戦争や学生運動が激化するなかで、アメリカを中心に成人文化に対抗した若者文化が出現した。マス・メディアは、その現象を「世代間ギャップ」として誇張して取り上げ、次第に一般の人びとの間にも世代間に価値や意見の対立があることを当然視する風潮が高まった。しかし当時、当然視されていた「世代間ギャップ」論に疑問を抱き、多世代家族研究をとおして実証的検討を加えたのが Bengtson である。Bengtson は、老親と中年期の子ども達との間の世代間関係を分析するにあたり、社会学や社会心理学の基本的問題である「社会的絆」を叙述するために用いられてきた「結合」や「連帯」概念を検討し、家族関係に適用することを目的に「連帯」の三要素を抽出した。その三要素とは、「一致(consensus)」、「愛情(affection)」、「結合(association)」である。これらが人間の相互作用にとって不可欠な要素であり、これらの要素の程度が高い程、関係の連帯の程度も高いとした。

Bengtson は、その後、家族連帯の次元を①客観的連帯の次元である「結合」、②主観的連帯の次元である「愛情」、③価値観の一致の度を測る「意識」に加え、④「家族構造」(family structure)⑤「機能的連帯」(functional solidarity)、⑥「規範的連帯」(normative solidarity)の三つの次元を追加した六次元として展開した。新たに追加された三つの次元のうち④「家族構造」とは、生存する家族成員の数と続柄、地理的近接性、世帯構成としてまとめられる次元である。これはリネッジの具体的特徴を示すものであり、どのような家族構造の特性を保持しているかは、老年期におけるサポート体系として家族が潜在的にどれほどのリソースを保有しており、どの程度リソースを動員できるかについて重要な示唆を与えると考えられている。⑤「機能的連帯」とは、家族成員間に経済的援助とサービスの交換がどの程度行われているかを示す次元である。危機状況や日常生活において、どの世代からどの世代へ援助が与えられているか、交換が相互に行われているのはどの世代ダイアドであるか、等の情報を得ることができることとされている。最後の⑥「規範的連帯」は、家族規範が家族成員によって維持されている程度を示す次元である。子どもは両親に援助をどの程度

与えることを期待されていると認知しているか、そして同時に、老人の側は子どもからの援助をどの程度期待しているかというような期待や義務に対する規範の受容度が示されるものだという (Bengtson & Cutler, 1976 ; Bengtson & Schrader, 1982 ; 森岡・青井, 1985)。

Bengtson による「世代間連帯モデル」はこれを用いた計量的実証研究が積み重ねられた結果、統計的に独立した構造を反映しており、実質上 (a) 構造的・行動的 (structural-behavioral) (組織的、機能的、そして構造的 associational, functional, and structural)、(b) 認知的一情緒的 (cognitive-affective) (情動的、同感的、そして規範的 affectual, consensual, and normative) という 2 つの総合的な次元に分けられることが明らかにされ、長く世代間家族関係研究、特に計量的な研究において支持され続けてきた (Bengtson & Roberts, 1991 ; Silverstein & Bengtson, 1997 ; Bengtson, 2001)。

3. 家族連帯／対立 VS アンビバレンス論争

しかしながら、「世代間連帯モデル」は、家族の多様性を最小化し、どのように世代間関係が「あるか」よりも「あるべきか」という規範的な実証がなされていることや「連帯」という用語それ自体がメンバー間のコンセンサスを強調していることが指摘される (Marshall, Matthews & Rosenthal, 1993)。また、この枠組みでは世代間関係の問題的、あるいは対立的側面を単純に連帯の欠如として扱い、解釈され、対立的関係性にあまり焦点が当てられていないとの批判がなされた (例えば Lüscher & Pillemer, 1998)。加えて、実証研究を通して、仲が良いけど同居は望まず近居するといった一見「矛盾」するような家族における世代間関係が明らかになるにつれ、家族の絆に存在する「連帯」と「対立」の共存という「矛盾」を組み込むことが模索されるようになる (吉原, 2009)。世代間関係が孕むこの「矛盾」への注目から端を発した議論は、学術雑誌 (Journal of Marriage and Family) の 64 号 (2002 年 August) で「A Symposium on Ambivalence in Intergenerational Relationships」と題した特集が組まれるまでになり、のちに家族の世代間関係における連帯／対立 VS アンビバレン

ス論争と呼ばれるような理論的インパクトをもたらした。

先のような批判を受けて、「世代間連帯モデル」は連帯が過剰であることによるネガティブな影響にも焦点を当てる「家族連帯—対立モデル」として修正された。「世代間連帯モデル」を見直し、改めるなかで、Bengtson ら家族連帯パラダイムを支持する研究者たちは、「対立」も家族関係のノーマルな面であり、それは家族メンバーたちが互いのことをどのように認め合っているのかに影響し、結果的にお互いに助け合おうとするかどうかに影響するのだと捉えるようになる。また、「対立」はその結果として状況がさらに悪化することばかりではなく、逆に「雨降って地固まる」というような、難しい問題のいくつかが解決され、関係の質全体が改善されることをも含むことが指摘される。すなわち、「連帯」と「対立」は、高い連帯から高い対立までの単一の連続体として捉えられるものではなく、世代間関係は例えば高い連帯と高い対立の両方を、あるいは低い連帯と低い対立の両方を示しうると主張するようになるのである（例えば Bengtson et. al., 2002）。

一方、世代間関係が孕む「矛盾」に注目し、概念化されたのが「家族アンビバレンス（family ambivalence）」概念である（例えば Connidis & McMullin, 2002b; Lüscher & Pillemer, 1998）。これは、世代間関係は家族メンバー間のアンビバレンスを生み出すかもしれないと主張するものであり、家族に対するポストモダ的なアプローチに基づくものである。すなわち、急激な社会的変化を伴う近代社会において、個々人は家族生活、とりわけ世代間関係にかかわる自らの役割について確信がもてなくなるなかで、メンバー間にアンビバレンスが生み出される可能性が出てくるというのである。Lüscher（2000; 2004）は、「世代間アンビバレンス」という用語を二つの次元における老親と成人した彼らの子ども達との関係性における矛盾を反映しているものとしてアプローチする。この二つの次元とは、役割や規範といったマクロ社会的構造レベルにおける矛盾と、認知や感情、そしてモチベーションといった心理学的一主観的レベルにおける矛盾である。Lüscher（2000）は、アンビバレンスを次のように定義する。すなわち、「同時に起こる感情、思考、意志、行為、社会的関係性、そして／もしくは構造、個人主義的あるいは集団主義的アイデンティティの形

成との関係で考慮され、一時的にもしくは永続的に矛盾する（両立しない）ものとして解釈される（されうる）」(p.15) と。このように、「世代間アンビバレンス」概念は、家族「連帯」が標準であると仮定することや、「対立」を心理学的にのみ捉えることを避け、社会学的な視点とも結びつけるものであった。

ところが、Bengtson は、この Lüscher によるアンビバレンスモデルは静的で、抽象的過ぎると批判する。すなわち、Lüscher によるアンビバレンスの定義は、個人の働きかけ（作用）を、構造的状況を変化させるというよりもむしろ構造的状況に適応するところに制限してしまうものだというのである (Bengtson, 2002)。その一方で Bengtson (2002) は、「世代間アンビバレンスモデル」を「連帯—対立モデル」とは競合しないものと捉え、「連帯と対立の相互作用から心理的かつ構造的アンビバレンスの両方が生まれてくるのだ」と主張する。すなわち、「連帯」と「対立」、「アンビバレンス」の概念が、家族関係に対するアプローチとして相互に競合ならびに敵対するものではなく、むしろ補完しあうものなのではないのかというのである。なぜなら、連帯—対立モデルは、家族の後半人生の関係性における複雑性、これは年老いた親が健康を害したり、ケア提供のニーズが変化したりといったような特にライフコースの移行時における複雑性なのだが、その全体像を捉えるものではないからである。

Bengtson による Lüscher のアンビバレンスモデルやその定義への批判を受け、Connidis と McMullin (2002b) は、アンビバレンスの再概念化を試みている。それは批判理論とシンボリック相互作用論的パースペクティブに基づくものである。そのなかで、アンビバレンスは社会構造のある状況は、社会的関係性の一つのセットとして捉えられる。彼らは Lüscher の「構造化されたアンビバレンス (structured ambivalence)」に対して「社会的に構造化された (socially structured)」アンビバレンスを強調する。すなわち、個人は彼らの家族メンバーとの関係性のなかで構造的に生み出されたアンビバレンスと交渉すると考えるのである。

以上、先にも述べたように世代間関係に孕む「矛盾」に端を発した議論は、近年において最も活発な家族研究における概念と概念モデルについての議論へと発展した。そのなかで精緻化されてきたのが「アンビバレンス」概念なので

ある。この「アンビバレンス」概念は、家族における世代関係、とりわけ老親とその成人した子どもとの間の関係性にまつわる「矛盾」を概念的に捉えようと、主として成人期における親子関係研究のなかに取り入れられ、発展してきた。続いては「アンビバレンス」概念にかんする先行研究における知見を整理するとともに、「アンビバレンス」概念の成人期きょうだい研究への導入について検討していくことにしよう。

4. 「アンビバレンス」概念の多次元性によってみえるもの

親子関係にかんする質的なインタビューデータによれば、存在する対立の多くが年老いた親の自律の問題と関連していたことを明らかにしている。しかしながら、基本的にこれらの対立は子ども達が両親を助けたいという点からみれば「肯定的」であったが、両親たちは子どもたちに依存したくはないという点では「否定的」でもあった。このように、それぞれのメンバーは、同じ移行や変化について話したとしても、その内容はそれぞれ独自のコンテクストから、そして自分自身の物の見方やほかの経験に基づくものであって必ずしも一致するわけではない。一致どころか、先の例のように真逆になることさえある。あるいはそれらの関係性のプロセスの部分と結果の部分で定義される内容が異なるかもしれない。

世代間家族関係の理論化について整理した Katz ら（2005）は、アンビバレンスモデルのより広い理論化に不可欠なものとして、次の三点を挙げる。第一に、アンビバレンスは質的データを通して最もよく捉えられるので、連帯—対立をもっと質的データを通して捉えるべきであるということである。これは、アンビバレンスが解決可能かどうかに焦点を当てるよりも、家族関係においてアンビバレンスが引き出される方法や家族メンバーがこれらの問題に接近する時に使われるプロセスや戦略に注目することの方が、研究者にとって実り多いということである。すなわち、アンビバレントについて、家族メンバーがそれぞれ独自のコンテクストからの評価、定義やそのプロセス、戦略を深く検討しようとするとき、これまで計量調査が主だった連帯—対立についての先行研究に対して、質的データの重要性を示すのが「アンビバレンス」概念なのである。第二に、アンビバレ

ンス概念の多様性に基づいて研究される必要性である。そして、第三にそれを操作化し、ライフコースにおける中心的移行時期における個人的、構造的次元を捉えることである (Katz, Lowenstein, Phillips, 2005)。以下、特にこの第二、第三の点について、もう少し詳細にみることにしよう。

アンビバレンス概念の多様性に関連する「アンビバレンスの多次的可能性」について議論した Connidis (2015) は、アンビバレンスの概念化の流れを次のように整理している。すなわち、研究の初期では「心理学的なアンビバレンス」と「社会的なアンビバレンス」で区別され、家族の絆と世代間関係についての研究が続いていた。「心理的アンビバレンス」とは、ある家族メンバーもしくは集団的には家族メンバーグループに対して、同時に作用するような相反する態度や感情を引き起こすことであり、「社会的アンビバレンス」とは、社会構造における矛盾を含むもので、それがアンビバレントな感情や態度を引き起こすことである (Connidis, 2012)。しかしながら、その区別は暗黙のうちにメゾとマクロレベルプロセスからミクロレベルを切り離すものであった。個人レベルである「心理学的アンビバレンス」は家族関係について、肯定的、否定的感情や気持ちを同時に抱くという矛盾に言及する (Connidis, 2010)。「関係性におけるアンビバレンス」はまた、矛盾する行動、あるいは行動と感情の間の矛盾にも言及する。そのようなアンビバレンスの経験は、状況の変化への反応やアンビバレンスの解釈、交渉、あるいはマネジメントの方法にも伝わるという (Hillcoat-Nalletamby & Phillips, 2011; Lüscher, 2011)。

一方、個人レベルを超えたアンビバレンス概念拡張の試みは、世代間関係研究における「社会学的アンビバレンス」と結びつくことになる。Lüscher and Pillemer (1998) は、このレベルの「アンビバレンス」を制度的資源と必要な物との間の矛盾として定義した。社会学では、家族関係の間にある矛盾を作り出している関係性のセットがどのように社会的に構造化されたなかにうめこまれているのかに焦点を当てる (Connidis & McMullin, 2002b)。

Connidis と McMullin (2002a, 2002b) は、関係性のダイナミクスについて議論するなかで、個人的なはたらきかけ（作用）と不平等で矛盾、構造化された社会関係が、家族関係の交渉を理解するのにより明示的で中心的なものであると

指摘する (Connidis, 2012)。すなわち、「どのように社会構造的な力が矛盾や対立を作り出しているのかは家族生活の社会的相互作用において明らかにされ、次第に家族メンバー間の衝突へとつながっていく。これが『社会学的アンビバレンス』だと」 (Connidis, 2010:140)。

構造化された社会的関係はジェンダーや階級、年齢、民族、エスニシティ、性的志向、そして能力を含む。その結果としての不平等性は、アンビバレンスを生み出す非常に重要な源泉であり、社会的布置や個人間の関係性にも影響を与える。これを捉えたのが「構造化されたアンビバレンス」という用語であり、この用語は構造化された社会関係によって作り出された矛盾を強調する (Connidis & McMullin, 2002a; 2002b)。

Lorenz-Meyer (2004) は、アンビバレンスを、反対する感情が同居する「個人的アンビバレンス (personal ambivalence)」と「組織的構造、たとえば国家机关あるいは社会政策といったようなものに内在する、行為に対立する申し出、指示、あるいはガイドライン」である (p247)「構造的アンビバレンス (structural ambivalence)」、そして、個人的アンビバレンスと社会的アンビバレンスが重なり合っていることに言及する「多元的アンビバレンス (multiple ambivalence)」からなるとする。特に「多次元的アンビバレンス」は社会学的アンビバレンスの見方をよく捕えるものである。なぜなら、構造化されたアンビバレンスとそれにたいする矛盾した気持ちとを結びつけ (Connidis & Walker, 2009)、家族ダイナミクスをその社会的コンテキストに結びつける (Connidis, 2012b; Willson, Shuey & Elder, 2003) からである。例えば Settersten (2003) が「コンテキストのなかの機関 (agency-in-context)」という概念を用いて個人的行為を社会生活のメゾやマクロレベルの拘束 (制約) や機会と結びつけようと試みているように、「多次元的アンビバレンス」もミクローメゾマクロの相互作用的結合を目指すものだからである (Connidis, 2003a; 2010; 2011; 2012; Connidis & McMullin, 2002a; 2002b; Lüscher, 2011; Lüscher & Hoff, 2013; Lüscher & Pillemer, 1998)。そのゆえに、アンビバレンスは個人の中にも関係性の中にも、社会的機関の中にも、そして社会の中にも観察することが可能なのである (Lettke & Klein, 2004)。

以上、アンビバレンスの多次元的概念は、多様性、複雑性、対立と調和の同居、継続性と変化についての探索に有効である。そして、アンビバレンスの多次元的な見方や変化についての考察は、個人的調整を超えた社会における矛盾や不平等性に迫ることを可能にする。続いては、このアンビバレンス概念が家族研究についてどのように用いられてきたのかについて見ていくことにしよう。

5. 家族におけるアンビバレンス

「集団的アンビバレンス (collective ambivalence)」(Ward, 2008; Ward, Deane & Spitze, 2008) 概念は、家族構造がどのようにアンビバレンスに影響するのかを探究することによって個人レベルを超えようとするものである。例えば、ある人の全ての成人した子どもたちがみな同じように感じるわけではないという点に注目する。複数の子ども達や時に継子たちを持つことは、年若い親たちの間に集団的アンビバレンスを起こりやすくさせ、ひいては彼らのウェルビーイングを損なわせる結果へとつながりうるというのである。ここにみられる家族構造とアンビバレンスやウェルビーイングとの結びつきは、家庭生活の制度化された期待とそこから外れることの個人的コストのあいだの結びつきを示唆するものである。Widmer ら (2009) は、家族形態における協力戦略と同時に緊張と対立についても検討する。ここでいう家族形態とは二者関係、核家族のまとまり、そして世帯を超えたものであり、このような拡大した家族形態について検討することは、世代間関係や血縁がない関係、義理の関係をも含んだ複雑な家族構造を研究するのに非常に重要なのである。「アンビバレンス」概念は、最初は親子関係へ導入されたが、例えば同世代のきょうだい関係など家族関係全体へと拡張可能であることが指摘されている。Connidis (2005) は、きょうだいの絆に本来備わっている矛盾にもとづくきょうだいアンビバレンス固有の根源 (原因) を次の 5 点に整理している。①関係が出生または養子縁組によって通常あてがわれるのに、西洋文化ではきょうだい役割はボランティアであるのが支配的であること、②きょうだいたちはそれぞれ別個の人生を生きているにもかかわらず、ライフコースの出来事を共有していること、③お互い

に対してアンビバレントな気持ちを持っているにもかかわらず、共有する家族タスクを解決するために協力しなくてはならないこと、④個々人が変化しても、彼らの生涯にわたる関係性は連続してあること、⑤それぞれ自身の関心に気をつけつつも、互いに対する義務を共有していること、である。

成人期におけるきょうだいの絆の理論化について検討した Walker ら (2005) は、「アンビバレンス」概念が、成人期におけるきょうだいの絆 (sibling ties in adulthood) についての研究のために個人的行為 (individual action)、家族関係、そして社会構造 (例えばジェンダーや階級、人種、民族、そして年齢のような社会関係のセット) を結びつけることを可能にするという。そしてまた、「アンビバレンス」に関するパースペクティブは、個人が他者との相互作用の中で経験する「社会構造的矛盾」(Connids & McMullin, 2002) と同様に「混在する感情 (emotions)」という形で調和と対立の共存を強調し、アンビバレンスは個人的行為を社会構造によって作り出される矛盾と結びつけるプロセスを示すのだと主張する。きょうだいとの絆のユニークな特徴は、比較的ボランティアな性質、すなわち、何がボランティアで何が義務なのかという点で明瞭性を欠くということにあるが、その特徴がアンビバレンスにとって独自の基盤を形成する。

例えば、2 人の既婚の姉妹と日常的なニーズを自分で満たすことのできない彼女たちの両親を例に考えてみよう。1 人の既婚のきょうだいは、経済的に心配のない夫からのサポートを得て彼女の両親を援助する一方、もう 1 人のきょうだいは、彼女自身の家族の家計を支えるために働かなくてはならず、援助が制限されるかもしれない。すると、援助できる娘は、多くの制約に直面してあまり助けられない娘よりも親に対して働きかける機会を多く持つ。このように、娘たち (姉妹) の間に存在する、援助するうえで避けられない不平等なパターンが、アンビバレンスとされるかもしれない。あるいは、もし姉妹が、自分たちの間にある「制約の違い」について認識していないなら、アンビバレンスはさらに強まるかもしれない (Jerrome, 1996)。

ここでキーになるのが、「制約」である。「制約」は個人間レベルでのみ存在するわけではない。両親のケアを与えることにおいて、したいと思いながら、

きょうだいと一緒に（親の）扶養をシェアできないことは、怒りや失望といった感情の緊張を引き起こす。これらの緊張した感情は、お金を出して助けを頼む（やとう）オプションの乏しいきょうだいたちの間でより一般的になるのである。アンビバレンスはその時、家族間、きょうだい関係のセット内それぞれでの社会階級と関連している。

また、規範の弱化は、きょうだい達が各自何をすべきか、あるいは両親のケアが自分たちの責任か否かについての考え方に多様性を生むかもしれない。アンビバレンス概念をきょうだい関係研究に適用することは、きょうだい関係をオンとかオフとかでみるのではなく、きょうだいの絆の小さいけれども重要な部分に焦点を当てる。すなわち、きょうだいたちは、たとえ健在でなくてもお互いの考えや気持ちに影響を与え合っているし、家族や個人間の歴史の共有は、たとえ接触がなくてもきょうだいの絆が潜在的に活性化されうることの意味する。きょうだいたちは、たとえ接触がなかったとしても親密な距離を保ち続け、実際には存在しなかったとしても、きょうだいたちの親や他の親族たちとの相互作用の相手になりうるのである。おば、おじ、いとこ、おい、めいなど義理の関係は「きょうだい」という存在から派生するため、きょうだいたちは互いを異なったネットワークのなかに結びつける機会が高まるのである。きょうだい関係を親族と非親族の両方を含むより広い社会関係のコンテキストのなかで捉える必要性がある。

では、アンビバレンス概念が家族関係を理解するために果たした貢献とは、いったい何だったのだろうか。それは、これまでポジティブな内容を想定しがちであった家族にかんする感情や構造が実際には矛盾を含みうることを意識化させることで、家族であっても期待が裏切られることがありうるという現実に即した分析を可能とする視点を与えたことである。先にも述べたように、たとえ仲が良い親子やきょうだいであっても否定的な感情は存在する。このようなアンビバレントへの対処として、アンビバレントな状況の再定義を促すいわば「アンビバレンスマネージメント」が注目される。例えば、両親のケアにおける貢献度の不平等がもたらすアンビバレンスをマネージメントするために、情緒的に親密なきょうだいたちはその不平等を「正当だ」とする傾向があるという

(例えば Ingersoll-Dayton, Neal, Ha & Hammer, 2003 など)。また、両親たちは自分たちの感情や情報を出さないようにすることで、彼らの成人した子どもたちとの間のアンビバレントな絆をマネジメントすることも考えられる。その方法とは、自ら助けを求めず、子ども達が「やりたくない」のではなく「理由があってできない」のだという「正当な」言い訳を出しつつ、接触頻度を減らすことでアンビバレントを減少させようとするものである (Hogerbrugge & Komter, 2012)。

6. 成人期きょうだい研究への「アンビバレンス」概念導入に向けて

これまできょうだい関係にかんする研究の多くは、愛情的であるとか親密性が高いといったポジティブな感情に焦点が当てられてきた。逆に最近では、「きょうだいリスク」のようなきょうだいに対するネガティブな感情に焦点を当てた議論が活発である (例えば平山・古川, 2016)。どちらもきょうだい関係についての真の姿のある一面を捉えたものであろう。しかしながら、Connidis (2012) が「一番親しいきょうだい」と「きょうだい全体との親しさ」で、両者が違った様相をみせている可能性を指摘し、両者を区別して考えていくことの重要性を主張しているように、一番親しいきょうだいに対しては当てはまるが、きょうだいネットワーク全体には当てはまらないということがありうる。また、大家族ほどきょうだいを選ぶ選択肢が多く、そのなかに気の合うきょうだいがいる可能性が相対的に高まるといったことも考えられる (pp.138)。つまり、アンビバレンスをマネジメントするということは、変化の程度や親密さ、対立、サポート、そして融和性 (適合性、互換性、両立性) の組み合わせによって、時間の経過とともに異なる結果を生み出しうるということを示している。

時間の要素をきょうだい研究に取り入れようと、きょうだい関係について全国家族調査のパネルデータ (NFRJ-08Panel) を用いた分析のなかで、吉原 (2018) は、人々にとっての生得的な関係の重要性が高まっていることを指摘したうえで、生得的な家族であるきょうだいとの関係性に注目することは、こ

れまで「見逃されてきた」家族関係がもつ機能の探究への地平を開くものだとしている。その機能の1つで、パネルデータの分析から得られた知見として注目するのが、きょうだいへの情緒的サポート期待にみられる特異性であった。

従来のきょうだい研究では、「きょうだいとの交流頻度」や「きょうだいへの情緒的サポート期待」といったきょうだいとのかかわりのある1つの側面についての検討が中心であった。しかし、パネルデータを用いた分析結果から、一口にきょうだい関係といっても、あるいは「きょうだいへのサポート期待」といっても、それが「情緒的」なものなのか、それとも「金銭的」なものなのかによってその様相が異なることが示唆されている。成人期以降のきょうだい関係といえば、相続問題や老親扶養問題など金銭的な関わりを中心とするリスクに関心が寄せられているが（例えば平山・古川 2016）、それだけにとどまらないきょうだい関係の多面性に目を向けることの重要性が改めて強調される。このきょうだい関係の多面性に焦点を当て、探究しようとする時に有効なのが、本稿で検討してきた「アンビバレンス」概念なのである。「アンビバレンス」概念を用いて、成人期のきょうだい関係にかんするデータを多面的、複眼的に捉え、実証的に分析していくことが今後の課題である。

参考文献

- Bengtson, V. L., 2001, Beyond the nuclear family: The increasing importance of multigenerational bonds. *Journal of Marriage and Family*, 63, 1-16.
- Bengtson, V. L. & Cutler, N., 1976, "Generations and Internagenerational Relations: Perspectives on Age Groups and Social Change", In R. Binstock & E. Shanas (eds.), *Handbook of Aging and the Social Sciences*, Van Nostrand.
- Bengtson, V. L., Giarrusso, R., Mabry, J.B., & Silverstein, M., 2002, Solidarity, conflict, and ambivalence: Complementary or competing perspectives on intergenerational relationships? *Journal of Marriage and Family*, 64, 568-576.
- Bengtson, V. L. & Roberts, R. E. L., 1991, Intergenerational solidarity in aging families: An example of formal theory construction. *Journal of Marriage and the Family*, 53, 856-870.

- Bengtson, V. L., & Schrader, S. S., 1982, Parent-child relations. In D. Mangen & W. Peterson (Eds.). *Handbook of research instruments in social gerontology*, Vol2. University of Minnesota Press, Minneapolis: 115-185.
- Connidis, L. A., 2003, Bringing outsiders in: Gay and lesbian family ties over the life course. In S. Arver, K. Davidson, & J. Ginn (eds.) *Gender and aging: Changing roles and relationships*. Philadelphia: Open University Press, 79-94.
- Connidis, I. A., 2005, Sibling ties across time: The middle and later years. In M. Johnson, V. L. Bengtson, P. G. Coleman, & T. B. L. Kirkwood eds., *The Cambridge handbook of age and ageing*, 429-436. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Connidis, I. A., 2010, "*Family ties and aging (2nd ed.)*". Los Angeles: Pine Forge Press.
- Connidis, L. A., 2011, Ambivalence in fictional intergenerational ties: The portrayal of family life in Freedom. *Journal of Family Theory and Review*, 3, 305-311.
- Connidis, I. A., 2012, Theoretical directions for studying family ties and aging. In R. Blieszner & V. Hilkevitch Bedford (eds.) "*Handbook on families and aging*", Santa Barbara, CA: ABC Clio, 35-60.
- Connidis, I. A., 2015, Exploring Ambivalence in Family Ties: Progress and Prospects. *Journal of Marriage and Family* 77 (February 2015): 77-95.
- Connidis, I. A. & McMullin, J. A., 2002a, Ambivalence, family ties, and doing sociology. *Journal of Marriage and Family*, 64, 594-601.
- Connidis, I. A. & McMullin, J. A., 2002b, Sociological ambivalence and family ties: A critical perspective. *Journal of Marriage and Family*, 64, 558-567.
- Connidis, L. A. & Walker, A. J., 2009, (Re) visioning gender, age, and aging in families. In S. A. Lloyd, A. L. Few, & K. R. Allen (eds.) *Handbook of feminist family studies*. Thousand Oaks, CA: Sage, 147-159.
- Hillcoat-Nalletamby, S., & Phillips, J. E., 2011, *Sociological ambivalence revisited*. *Sociology*, 45, 202-217.
- 平山亮・古川雅子, 2016, 『きょうだいリスク 無職の弟, 非婚の姉の将来は誰がみる?』朝日新聞出版.
- Hogerbrugge, M. J. A., & Komter, A. E., 2012, Solidarity and ambivalence: Comparing two perspectives on intergenerational relations using longitudinal panel data. *Journal of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social*

- Sciences*, 67B, 372-383.
- Ingersoll-Dayton, B., Neal, M.B., Ha, J.H., & Hammer, L. B., 2003, Redressing inequity in parent care among siblings. *Journal of Marriage and Family*, 65, 201-212.
- Jerrome, D., 1996, Continuity and change in the study of family relationships. *Aging and Society*, 16, 91-104.
- Jonson, C. L., 1995, Cultural diversity in the late-life family. In R. Blieszer & V. H. Bedford (eds.), "*Handbook of aging and the Family*." Westport, CT: Greenwood, 307-331.
- Katz, R., Lowenstein, A., Phillips, J., Daatland, S.O., 2005, Theorizing Intergenerational Family Relations: Solidarity, Conflict, and Ambivalence in Cross-National Contexts. In Bengtson, Acock, Allen, Dilworth-Anderson, Klein (eds.) "*Sourcebook of Family Theory & Research*." SAGE, 393-420.
- Lettke, F. & Klein, D. M., 2004, Methodological issues in assessing ambivalences in intergenerational relations. In K. Pillemer & K. Lüscher (eds.) "*Intergenerational ambivalences: New perspectives on parent-child relations in later life*." New York: Elsevier, 85-113.
- Lorenz-Meyer, D., 2004, The ambivalences of parental care among young German adults. In K. Pillmer & K. Lüscher (eds.) *Intergenerational ambivalences: New perspectives on parent-child relations in later life*, New York: Elsevier, 225-252.
- Lüscher, K., 2000, Family issues between gender and generations (Seminar report, European Observatory on Family Matters). Vienna: Austrian Institute for Family Studies.
- Lüscher, K., 2004, Conceptualising and uncovering intergenerational ambivalence. In K. Pillemer & K. Lüscher (eds.), "*Intergenerational ambivalences: New perspectives on parent-child relations in later life*." Oxford: Elsevier Science, 23-62.
- Lüscher, K., 2011, Ambivalence: A "sensitizing construct" for the study and practice of intergenerational relationships. *Journal of Intergenerational Relationships*, 9, 191-206.
- Lüscher, K., & Pillemer, K., 1998, Intergenerational ambivalence: A new approach to the study of parent-child relations in later life. *Journal of Marriage and Family*,

- 60, 413-425.
- Marshall, V. W., Matthews, S. H., & Rosenthal, C. J., 1993, Elusiveness of Family life: A challenge for the sociology of aging. In G. L. Maddox & M. P. Lawton (eds.), "Annual review of gerontology and geriatrics: Focus on kinship, aging and social change", 39-72, New York: Springer.
- 森岡清美・青井和夫, 1985, 『ライフコースと世代—現代家族論再考—』 垣内出版.
- Settersten, R. A., Jr., 2003, Propositions and controversies in life-course scholarship. In R. Settersten, Jr. (ed.) "Invitation to the life course: Toward new understandings of later life." Amityville, NY: Baywood, 15-45.
- Silverstein, M., & Bengtson, V. L., 1997, Intergenerational solidarity and the structure of adult-child parent relationships in American families. *American Journal of Sociology*, 103, 429-460.
- Walker, A. J., Allen, K. R., Connidis, I. A., 2005, Theorizing and Studing Sibling ties in Adulthood. In Vem L. Bengtson, Alan C. Acock, Katherine R. Allen, Peggye Dilworth-Anderson, David M. Klein (eds.), "Sourcebook of Family Theory & Research" SAGE.
- Ward, R. A., 2008, Multiple parent-adult child relations nad well-being in middle and later life. *Journal of Gerontology Series B: Psychological Sciences and Social Sciences*, 61B, S239-S247.
- Ward, R. A., Deane, G., & Spitze, G., 2008, Ambivalence about ambivalence: Reply to Pillemer and Suitor. *Journals of Gerontology Series B: P sychological Sciences and Social Sciences*, 63B, S397-S398.
- Widmer, E., Giudici, F., Le Goff, J-M., & Pollien, A., 2009, From support to control: A configurational perspective on conjugal quality. *Journal of Marriage and Family*, 71, 437-448.
- Willson, A. E., Shuey, K. M., & Elder, G. H. Jr., 2003, Ambivalence in the relationship of adult children to aging parents and in-laws. *Journal of Marriage and Family*, 65, 1055-1072.
- 吉原千賀, 2009, 「老親と世代間関係」野々山久也編『論点ハンドブック家族社会学』世界思想社, 287-290.
- 吉原千賀, 2018, 「きょうだいへのサポート期待と家族関係: NFRJ08-Panel データによる分析」『奈良女子大学社会学論集』第25号, 54-68.